

〈特集〉「東南アジア海域世界の森と海」(II)

サバ調査ノート

鶴見良行\*

A Note on My Journeys to Sabah

Yoshiyuki TSURUMI\*

Introduction: The society of Sabah, Malaysia holds particular interest for a Japanese observer. Because of a growing concern in Japan for health and conservation of the natural environment, consumption there of the products of cocopalms and oilpalms is increasing. Malaysia is the largest producer of oilpalms in the world, and Sabah, the third largest producer state of oilpalms in Malaysia, is still expanding its plantations. The oilpalm plantations concentrated in the Tawau area were first opened in the 1910s by Japanese croppers of abaca. Thus, the developmental history of the plantation economy in eastern Sabah is of special concern for Japanese. In the countryside of Sabah, in the coastal areas in particular, there are a number of small kampungs of fisherman, most of whom migrated from the Philippines. In the oilpalm plantations, on the other hand, the majority of the labourers are Bugis farmers from Sulawesi. Sabah is a state of immigrants. This is quite impressive for these Japanese who believe, erroneously, that their country is ethnically homogeneous. Thus, observation of Sabah society would have an educational effect for ordinary Japanese.

I. This chapter tries to explain the efforts made by Sabah leaders since independence to create a new, single Sabahan national identity.

II. The reality, however, is a multi-ethnic society, and some state documents recognize this crucial fact. The Department of Statistics, Malaysia, Sabah Branch, *Annual Bulletin of Statistics*, 1989 defines Pribumis of Sabah as follows: Kadazan, Kwijau, Murut, Bajau, Illanun, Lotud, Rungus, Tambanuo, Dumpas, Maragang, Paitan, Idahan, Minokok, Rumanau, Mangka'ak, Sulu, Orang Sungei, Brunei, Kadayan, Bisaya, Tidong, other Indigenous Malay, Indonesian Sino-native, Native of Sarawak, Native of Philippines and Cocos Islanders. This list of ethnic groups includes almost all the inhabitants of insular Southeast Asia. The Sabah government on one hand tries to create a unified Sabahan national identity, but on the other includes all the ethnic groups as their own "Pribumis." This is the situation in which the State of Sabah now stands.

III. In the coastal areas, which consist overwhelmingly of mangrove swamps and attols, there are small fishing villages. Some of the inhabitants still live in house-boats (*lepa-lepa*) and move between the Sulu Islands and the east coast of Sabah. A distinction is also drawn between Bajau Darat and Bajau Laut. The majority of inhabitants of the squatter area in Sandakan are from Mindanao and Sulu. There are also a number of Filipino immigrants working in *pasar-ikan* in Kota Kinabalu, Sandakan and Tawau.

IV. Cocos Islanders: Cocos Island is an isolated attol off west Java in the Indian Ocean under Australian government. Three Kampung Cocos were noted in east Sabah. The villagers are Malay muslims who migrated in the postwar period.

---

\* 龍谷大学経済学部; Faculty of Economics, Ryukoku University, 67 Tsukamoto-cho, Fukakusa, Fushimi-ku, Kyoto City, 612, Japan

## はじめに

二つの関心事があってこの3年ほど東マレーシアのサバ州に通っている。その関心事項とは(1)サバで急速に発展しているオイルパーム農園について調べる。これは現在私が主催しているヤシ研究会の調査の一環なのだが、サバは英領植民地時代の1910年代から久原房之助や三菱の大資本がアバカ・プランテーションを大きく拓いた土地であり、それが今日はそっくりオイルパーム・プランテーションになっているので日本移民史の関心からいっても面白い領域である。(2)もう一つの問題領域はここが一種の *borderless region* であってマカッサル海峡をはさんでさまざまな農民や海民がかなり自由に出入している、東南アジアの海洋社会にたいする私の興味をひいていたのである。以下はそこで歩きながら考えていた雑感である。

### I サバ人 (Sabahan) とは誰か

私事から始めて恐縮だが、私は京都の伏見区に住み勤務する大学もここにある。土地の老人たちは「あすは京都へ行く」というような言葉づかいをして自分たちが京都市民だとは思っていない。それと似たような事情がサバにもある。半島マレーシアが狭義のマレーシアであり、ボルネオのサラワクとサバは住民の日常感覚からいっても行政のありようからいっても、まったく別の地域である。national flag carrier のマレーシア航空で首都のクアラルンプールからサラワクのクチン経由、サバのコタキナバルに飛ぶ。いうまでもないがクチンはサラワク州の州都、コタキナバルはサバ州の州都である。マレーシア国民も外国人もそれぞれの空港のイミグレーションでパスポート検査を受ける。大阪から博多へ飛ぶのに日本人も外国人もパスポートを携行しなければならないようなものだ。

こうした地域独自性はイギリスによる植民地化の歴史の相違からきている。半島部は東インド会社の手で植民地となり、サラワクは「白人ラジャ」James Brooke がブルネイから割譲を受けて王国を建設し、サバは North Borneo Chartered Company という勅許会社になった。こうした歴史事情が跡を引いてマレーシア連邦の一員でありながらそれぞれが地域ナショナリズムとっていいような独自性を主張している。サバには伝統的に中央連邦政府にたいする抵抗感がある。それで Sabahan という独自のナショナリズムを創造しようとする。それもサバ州本来の indigenous people が住民であるのなら分かりやすいのだが、サバの三大産業である石油と木材とオイルパームで働いている労働者の大部分は外来の移民だから「住民とは誰か」は厄介な問題である。

サバは植民地時代から今日まで労働力不足に苦しんできた。外部からの移民労働者導入が一貫した開発政策だった。そもそも北ボルネオは植民地時代以前はスルーのタオスグ王家とブル

ネイ王家に両属する土地だったから両方向から海民が自由に出入していた。しかし彼らはもともこの地にいたカダサン (Kadazan) その他の先住民と同じく植民地主義が導入したプランテーションには向かなかった。それで外部から農民を労働力として導入してきた。こうして北ボルネオ住民の種族構成は流動的で複雑なものとなった。こうした条件がありしかも移民をなおも導入し続けながらサバ州ナショナリズムを創出しようとするのだから、この困難は、幸福に単一民族神話を信じているわれわれ日本人にはほとんど理解を絶するものがある。しかし逆にいえば現実に存在するこうした流動的な多民族状況に接することは私たちの陥っている単一民族神話を打破するのに有効な解毒剤にもなりうるのである。

## II さまざまな概念規定

サバ州政府ないし公立機関が使用している種族別人口統計もしくは労働力統計はかなり混乱している。大よそ三種類の種族別統計が使われている。例えば連邦政府の *Yearbook of Statistics, 1989* は表1のように Bumiputra & Others と Chinese という二分法をサバ州人口について採用している。ちなみにこの *Yearbook* は半島マレーシアについては, Malay, Chinese, Indian, Others という四分法を使い、なぜか Bumiputra という概念を排除している。Malay だけが原住民ということなのだろうか。Department of Statistics Malaysia, Sabah Branch, *Annual Bulletin of Statistics, 1989* は二種類の分類 (表2, 表3) を用いる。

同じ公式統計において Pribumis と Bumiputra が使われている理由は不明である。ともに Indigenous と訳されるこの言葉には次のような注釈がある。

Detailed classification of Pribumis, Sabah is as follows: Kadazan, Kwijau, Murut, Bajau, Illanun, Lotud, Rungus, Tambanuo, Dumpas, Maragang, Paitan, Idahan, Minokok, Rumanau, Mangka'ak, Sulu, Orang Sungei, Brunei, Kadayan, Bisaya, Tidong, other Indigenous, Malay, Indonesian, Sino-native, Native of Sarawak, Native of Philippines and Cocos Islanders.

Sino-native は華人男性と原住民女性の間でできた混血児でほとんどサバへの同化を遂げた人々である。最初の Kadazan から Tidong までは, Illanun のように, フィリピンのミンダナオ出身が明らかなものもあるが, そのなかにはサバに移民している者もあるからそれはまあ許せるとして, インドネシア, フィリピンの住人をすべて入れるとなるとサバ州の Pribumi は島嶼東南アジアの全住民を含むことになってしまう。誤解のないように言うが, 私はこれではまずいと指摘しているわけではない。どのみちそれはサバの人々が決めるべきことがらである。ではあるが, こうしたサバの Pribumi 解釈は, 新しく Sabahan という identity を創出しようとする地

表1 サバ州種族別人口構成  
(1987; ,000)

Bumiputra & Others	1,129.4
Chinese	190.8

表2 サバ州種族別人口構成(1980)

Pribumis	838,141
Chinese	163,996
Indians	5,613
Others	3,296

表3 サバ州種族別就労者統計(1989)

Bumiputra	39,782
Chinese	8,366
Indonesians	69,536
Filipinos	13,568
Indians	155
Others	9,789

域ナショナリズムの努力と矛盾することは明らかだ。

この注釈の Pribumi 表の最後にある Cocos Islands とはどこか。The Times Atlas や Encyclopaedia Britannica を調べるとアジア太平洋海域に Cocos Islands は遠くインド洋上とミクロネシアのグアム近海にあるだけでどちらも北ボルネオへの移民出身地としてはありそうもない遠方である。だからこの問題はかなり長いこと私にとっては謎だった。それがこの4月何度目かの調査旅行でサバへわたったとき偶然にわかった。やはり歩けば何がしか得るところがある。このことについては後述する。

もう一つ SLDB (Sabah Land Development Board) のサンダカンにおけるオイルパーム・プランテーションの種族別労働統計(表4)をあげる。SLDB はサバ州が1969年に自営農民創出と農業開発のために設立した公社である。いくらかカカオ栽培にも手をのばしたが、あくまで主眼はオイルパームだった。したがってその労働者はオイルパームの労働者である。

表4の示すとおりサンダカンにおける SLDB の5農場では労働者の86%が外国籍のインドネシア人である。そのほとんどがスラウェシ島のブギス (Bugis) 農民である。出身地統計はないが私たちが農場で尋ねたところではほとんど南スラウェシ全域にわたっていて東岸ボネ湾側も多い。ブトン (Buton) 島民もいた。こうした種族別統計で表2の人口統計よりも表3の労働統計がより細かい分類概念を用い、さらに SLDB の表4労働統計では種族と国籍を組合わせた概念を発明していることにはサバの歴史が影を落としている。マレーシアでは移民の出入は連邦政府の管轄下にありいわゆるイミグレーションが扱っている。

どちらかというところこの役所はサバでは移民の入国に警戒的である。私たちが話を聞きにいてもほとんどけんもほろろである。タウウ (Tawau) の貨客船埠頭はスラウェシ農民の発着する港であるが、ヤシ研究会の若い仲間はこのイミグレーションで写真を撮ってフィルムを没収された。警察や軍隊も入国管理局と同じく移民にたいして厳しい。これにたいしてブギス農民を積極的に導入してプランテーションに配給している仕事は MMFB (Malaysian Manpower

表4 SLDB サンダカン農園労働者の種族別構成：July, 1972

農園	Malaysian			Foreign		合計
	Sabah Origin Malay	Kadazan	non-Sabahan Malay	Filipino	Indonesian	
Menanggol	29	1			372	402
Sepagaya	5	1	1		192	199
Gomantong	14				259	273
Luboh	97	4	3		146	250
Nangoh	4	22		1	93	120
合計	149 (12%)	28 (2%)	4	1	1,062 (86%)	1,244 (100%)

出所：SLDB 本部資料，1993年入手。

Fund Board) の分担であって、ここの役人はなんでも自由に話してくれる。もともとこの役所は連邦政府の管轄ながら独立初期に半島マレーシアの土地無し農民をサバに導入するために設けられたのだが、半島農民はそれなりに安定してしまっただけで新しい任務としてブギス農民を導入して、ときあたかも発展し始めたオイルパーム・プランテーションに配給する仕事を与えられたのである。

ここの若い役人はスラウェシのパレパレ (Parepare) からタワウ対岸のヌヌカン島 (Nunukan) まで来れば、後はどのようにも密入国できると教えてくれた。しかしプランテーションの多くは大資本の企業農園であるから後難を恐れて正式の労働ビザを持つ移民しか雇わない。これにたいしてフィリピン人は、北ボルネオがスルー・ブルネイ両属だった歴史から今日でもフィリピンとマレーシアのあいだで領土問題が未解決になっているために取締りがあいまいになっている。だから MMFB はフィリピン人を扱わない。表4でフィリピン人が少ないのはそのためである。ともあれ正規に就業するとなると blue card と呼ばれる身分証明書が必要である。そしてこの ID card の偽造が盛んに行われている。というような事情があるから、就業統計、労働統計は種族だけでなく国籍にも敏感にならざるを得ないのである。

### III 海辺の人びと

以上は公式の統計とその裏側をちょっと覗いたというかたちである。だがサバをこまかく歩くと公式統計には登場しないような移民集団がひっそりと沿岸部で暮らしている。13年前コタキナバルから海岸道路をミニバスで南下してボーフォート (Beaufort) へ出た。クロッカー山脈を縫ってパダス河が流出している。滔々たる流れである。ラブアン炭鉱の鉄道技術者だった A. J. West が北ボルネオ西岸の鉄道建設に着手したのは1896年である。この鉄道の重要な基点になったのがボーフォート。今でも鉄道はコタキナバル→ボーフォート→テノムを繋いで走っている。ボーフォート→テノム間はパダスの急流に沿っている。私はその下流に沿って海岸の

クアラプニュー (Kuala Penyu) へ出てみたかった。なぜそんな所へ行くことにしたかという  
と、当時私は「歴史は定着農耕の発達した平野部で起こる」という古今東西の史学者たちの定  
説に異論を提出して「塩生植物マングローブの生える汽水帯の沼地も東南アジアでは重要な歴  
史舞台だった」という仮説を提出してみたかったのである。この発想は後に『マングローブの  
沼地で』[鶴見良行, 朝日新聞社, 1984] という歴史ルポルタージュになった。

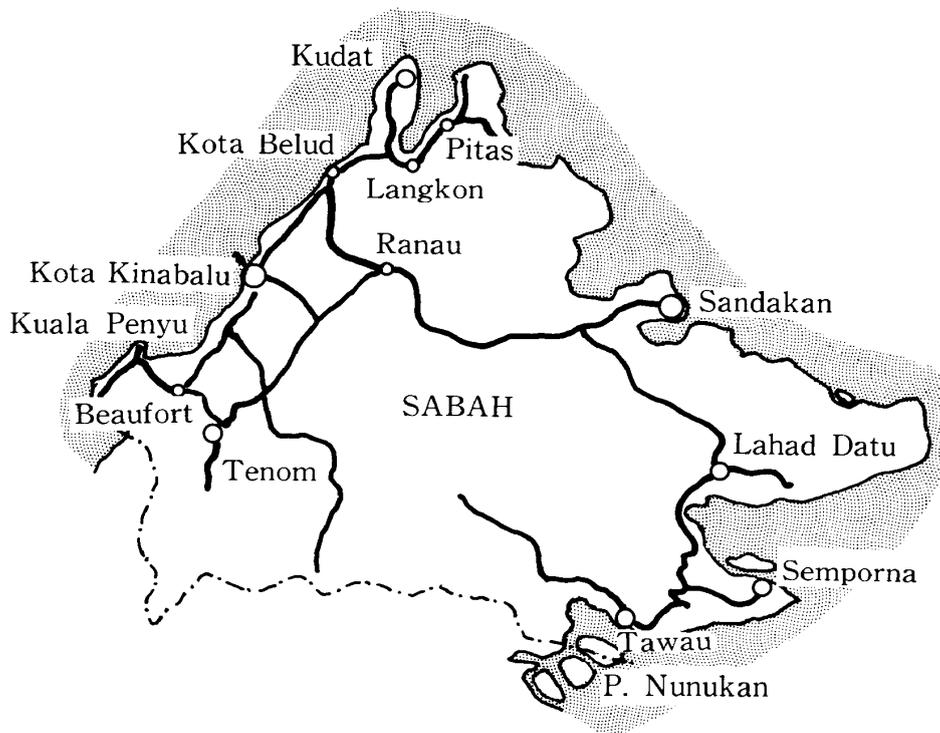


図1 サバ州と文中にあらわれる主要地名

地図で調べるとクアラプニューまで路は通っていたがバスはない。仕方なくタクシーを頼んだ。あたりは湿原でぼつりぼつりと家がたちサゴヤシが生えていた。ボーフォート帯は一次林ではないまでも熱帯雨林の景観であるが、そこから僅かに海側へ出ると景色は一変して荒涼たるものとなる。若い運転手はパキスタン人だった。英語もマラヤ語も片言しかしゃべれなかったが、辛うじて知り得たのはインド・パキスタン戦争にさいして故郷を離れこの土地に集団入植したのだという。こんな荒涼とした湿原のどこかにパキスタン村があるらしい。どうやって生計を立てているのだろうか。サゴではあるまい。さして難しい技術ではないにしてもパキスタン人がサゴヤシ採取の方法を知っていようか。そんなことを頭の片隅でちらと思ったことを覚えている。パキスタン人の *exodus* など想像したことさえなかった。だがそれから数年後ここからさして遠くはないスルー群島のタウィタウィ (Tawitawi) でパキスタン人のパン焼きに遇った。ここにもパキスタン移民がひっそりと暮らしていた。

1992年7月若い仲間と4WDをレンタルしてサバ州北部クダット(Kudat)とピタス(Pitas)両地方を回った。SLDBのパームヤシ農園を見て歩くことが主目的ではあったのだがピタスのカバタサン村(Kabatasan)に海外青年協力隊員として2年住んでいた鈴木宏二君がヤシ研究会員として同行しているのでかなり細かく歩けた。SLDBはクダット地方に5カ所のオイルパーム農園計8,777haを持っている。その最大の農園はクダット半島とピタス半島にはさまれた湾の底部に近いランコン(Langkong)にある。この地区にSLDBがパームヤシ農園を拓いたのは1972年、最初の搾油工場がランコンに建設されたのが1980年である。オイルパームは種を植えてから採果期まで4年ほどかかる。採果期の1976年からおよそ4年はfresh fruit bunch (ffb)をトラックでポーフォートの製油工場まで運んでいた。オイルパームのffbは重量30~40kgほどの巨大なマツカサ状である。その一片一片を絞ってcrude palm oil (cpo)をとる。オイルパームは果肉内に独特の酵素を潜ませていて成熟したffbほど親樹から切断するとその酵母が作用し始めて果肉を分解してしまう。市場価値は無くなる。それでオイルパームは採取後24時間以内に製油工場に入れなければならない。クダットからポーフォートまで今日でも5時間は掛かるからこのトラック輸送の4年ほど同地区のffbにはほとんど市場価値は無かったという。どうしてそんな拙劣なことをしたかについてはいろいろと理由があるがここでは触れない。ランコンの製油工場で搾油したcpoは「どうやって運び出すか」と訊ねると近くの崖に設置したパイプまでトローリートラックで運び小型タンカーに積み替えるという。そこからサンダカンへ輸送し大型タンカーに積み替えて海外へ輸送する。クダット地方からなら西岸のコタキナバルのほうがはるかに近い。コタキナバルにはコンテナを積む近代的な埠頭もある。それをなぜ遠いサンダカンまで運ぶか。北ボルネオ東岸は西岸よりはるかに地味が豊かでオイルパームの栽培はサンダカン側で行われているのである。東岸に貯油設備があるがコタキナバルにはない。

そのパイプのある崖まで見物にいった。粗末な施設でまったくの無人。だが崖を降りるとマングローブの茂る狭い湾に10軒ほどの集落があった。崖に炭焼きかまどが2基あった。マングローブで木炭を焼いているのであった。炭焼きかまどはマラッカ海峡沿岸であちこち見ているが北ボルネオでは初見。老人が丸木舟を操って戻って来る。英語を達者にしゃべる。「Filipinoだ」という。「Suluか」と訊ねると「Zamboanga」という。20年ほど前に移ってきた。たぶんミンダナオ内戦時(1972~76)の避難民だろう。僅かな漁で暮している。そういえばランコンからクダットへ通じるハイウェイから東へ入ってこの崖浜へ降りたのだがそのハイウェイには小屋掛けの売店が並んでいて野菜と魚貝類を売っていた。私たちはハマグリ一盛りを買った。大きな底魚もあった。魚貝類を売っているのがBajau Lautで野菜を並べているのはカダサンである。ハマグリ売りが自ら「Bajau Laut」と名乗った。この湾内のバジャウ海民文化についてはもっと調べなければ確実なことは言えないが東岸のスルー群島方面ではバジャウ・ラウト

(海バジャウ) は Bajau Darat (陸バジャウ) に差別されて自らバジャウ・ラウトを名乗ることはほとんどないからである。この一帯では海バジャウと進取の気性に富んだ内陸農耕民のカダサンが共棲 (symbiosis) している。

ここへ来る前、コタベルッド (Kota Belud) の町から西へそれて海際へ出た。コタベルッドは観光パンフレットなどには裸馬にまたがって海際を疾走する写真が「陸に上がってカウボーイになったバジャウ」という説明とともに載っている。海民の半強制的な定着政策は、日本でも見られたことである。スラウェシのワジョ (Wajo) ではブギス人の村長がバジャウを定着させるために主婦を舟に乗せないことにした。陸に留め置かれた人質である。だからコタベルッドでバジャウがカウボーイに変身しても格別に驚きはしない。ここは確かに牧畜の盛んな土地で町中を牛がのそのそと歩いている。「ヒトを轆くよりケモノを轆いたほうが弁償が高い土地です」と鈴木君はいう。だがこの沿岸部のバジャウが一度に全員カウボーイに転向したわけはあるまい、舟から馬に乗り換える中間のバジャウがどこかに残っているはずだ。そんな推定から1992年も妻と二人で浜へでるミニバスへ乗った。着いた所は茫漠たる砂浜でヒトも舟もなかった。老婆がひとり流木を拾っていた。これは私のマラヤ語の拙さからくる失敗だった。pantai (砂浜) という単語を使ったのがいけなかった。Pantai Emas を教えられた。Pantai Emas “黄金浜” とは名ばかりの荒涼たる浜辺である。kampong nelayan (漁村) と訊ねなければならなかったのである。今回はマラヤ語の達者な鈴木君がいて自分たちの車もある。92年のときと同じ道を西に向かい途中から左にそれる。前方から黄色く塗った大型10トン積みのトラックが厚いビニールシートをかけて頻繁に現れる。よほど大掛かりな輸送である。私たちはバジャウの漁村を捜そうとしているのだが、このトラックの正体も気になる。しばらく行くと大きな河にでた。アバイ河 (Sungai Abai) だ。立派な橋が掛かっている。すぐ右手が海で河口に20戸ほどの漁村がみえる。ここがバジャウ村に違いない。

村を後回しにしてまずはトラックの正体を確かめることにした。約10分も未舗装の道を走ると美しい湾に出た。眼下に立派な突堤があり2,000トンほどの貨物船が着岸している。シンガポールの船だ。嚴重なゲートがありガードマンがいる。立派な立札に Mamut Copper Sdn. BHD とある。これで分かった。キナバル山麓ラナウ (Ranau) から南へ入ったマムート銅山の銅鉱はここに設けられた埠頭から運び出されていたのである。この鉱山には三菱金属が投資しており、かつて足尾の渡良瀬川鉱毒事件と同じような公害が伝えられたことがある。こんな人里離れた専用の埠頭設備からひっそりと運び出しているのは民衆の眼を恐れてのことではないか。そんなことがちらと頭を掠める。マムートでは銅鉱山の廃液をためるために広大な湖が掘られその砂泥で高さ 20 m もの堤防が築かれている。溜まった廃液はどうなるのだろうか。

アバイの橋へ戻り漁村へ入って行く。思った通りバジャウ族だった。そして「船から馬へ」の中間型があるはずという仮説も当たっていた。バジャウの家は一般に海上の杭上家屋が多く

陸上に家を建てるときも楕形に堀割りを切って家の下まで舟が着くようにするが、ここは砂浜の完全な陸地にコンクリートの足をはかせたピロティ風の家を建てその床下に牛を飼っている。もうこうなるとたやすく移動はできまい。寄ってきた老人に話をきく。スマトラで勉強してインドネシア語の達者な笹本浩子さんがしばらく話をしていたら老人は「自分たちはスルーから移って来たのだが、バジャウではなくウビアン Ubian だ」と言う。なにやらおずおずと自己主張している感じだ。スルーには2度渡っているがウビアンという種族名を耳にしたのは初めてである。このウビアン村では浜造船があったが、もはやバジャウの伝統的なレパレパではなく船尾を直角に断ち落した4トンほどの近代的漁船だった。ここまで変わってしまえば強化プラスチックへ移るのも近い。ウビアンについてはフィリピン大学に留学してスルー群島の諸言語を研究しようとしている赤嶺淳君が書いて来た。それを引用する [筆者への私信, 92, 11/22]。

バジャウだとか、サマルだとか民族の名前でこの地域の言葉呼び分けるのでなく Sama/Bajau もしくは単に Sama と呼ぼうと思います。そのかわり Sama Sitangkai のように地名で方言差を現すことにします。言語学の視点からは、Bajau と Samal を区別することは控えたほうが都合が良いのです。この両者の区別には、Bajau が海民で、Samal が農耕民であり、また Bajau がアニミストで Samal がムスリムだとか Bajau が差別される民で、Samal が差別する民である、等の種々の対比があることも充分承知しています。また ethnicity を考えるには、この区別こそが大切なことも承知しています。が、Bajau とか Samal とかの区別を考慮し始めると、動きがとれないのが現状です。とりあえず今は、SIL (Summer Institute of Linguistics) の慣用に従って Sama/Bajau としておきます。[私たちバジャウ研究会は Sintangkai の Haji Musa を日本に招んだのだが、そのとき彼は「自分たちは Bajau よりも Samal と呼ばれたい」と語っていた。]

SIL はスルー群島の Sama 語を Northern Sama (Balangingi), Central Sama (Siasi), Western Sama (Pangutaran), Southern Sama (Bongao, Sanga Sanga), Sama Mapun (Jama Mapun) の五つに分類しています。またフィリピン全体でサマ語群を考えるときには、ピコールとサマル島の間には浮かぶ Capul Is. の Abaknun, サンボアング半島の付け根の Sibuguey Bay の Sama Sibuguey, バシラン島の Yakan の三つの言語を含めて八つに分類しています。..... Ubian には North Ubian と South Ubian の二つがあり、面白いことに SIL の言語学的分類では、North Ubian は Western Sama で、South Ubian が Central Sama となります。次回訪れる予定の Sapa-Sapa はこの South Ubian の西になります。Tandubas, Latuan 周辺に島が幾つあるのか想像もつきませんが、このあたりからシタンカイまでの

島じまを徹底的に歩いてみたい衝動に駆られているところです。

ウビアンにはもう一度出遇った。クダットの街をはるかに通り過ぎて鈴木君は車を北へ走らせていった。その夕方私たちはクダット半島の突端、ということはボルネオの最北端だが、を見た。もう十歩も進めば南支那海に呑みこまれてしまう崖の上である。こんなところまでやってきた日本人はほとんどいないだろう。その崖のふもとに5戸ほどの集落があった。6畳一間ほどの粗末な高床の小屋である。前方は荒涼とした浜である。男が少年と2人で丸木舟を作っている。かれらがやはりウビアンだった。アバイのウビアンよりはるかに貧しげである。

また別の Filipino 移民もいる。North Borneo Chartered Company のごく初期に総督府が一時置かれていたクダットよりピタス半島はずっと未開発だが最近森林伐採が盛んで海岸には製材所や貯木場がある。そんな海岸のマングローブ沼地を拓いた泥地に杭上家屋を建てナマコを干している村があった。男たちに「これは trepang ではないか」と訊ねると怪訝そうな顔をする。trepang はインドネシア語のナマコである。やはりバジャウだといった。スルーの地名をいくつか挙げてみたが、やはり怪訝そうな顔をする。「自分たちは Filipino ではない。Malaysian だ。スルーは遠い」ともいった。彼らはよほど以前にサバへ移住してきたらしい。ちなみにコタキナバルでもサンダカンでも市場では干しナマコを戻して売っているが、センポルナ (Semporna) のバジャウ以外にナマコを干していたのはここが初めてである。

バジャウ族は今日、ミンダナオ島南部からボルネオ島一帯、インドネシア東部の海辺に広く薄く分布しているが、もっとも集中しているのはスルーの小島群である。ここからサバ州のセンポルナ、タワウにかけてその海上村に住む漁民はほとんど例外なくバジャウである。しかし上述のアバイ村がそうであるように実はサバ西岸にもかなりのバジャウがいる。コタキナバルのすぐ対岸にガヤ島 (Gaya) がある。ここは住民のほとんどがバジャウ族の島である。マングローブの浅海に水路を筒型に切って家の下まで舟が入るようにした村の形はこの海域の海民の伝統である。コタキナバルとガヤ島の間には多数の船外機付きはしけが就航していて10分と掛からない。

しかしこのバジャウも定着化している。男衆はコタキナバルで200~300トン級のトロール漁船に雇われていて自分たちではほとんど漁をしない。コタキナバルの魚市場はこの海域一帯でもっとも盛大な市場とっていいほどここは漁業が盛んだが、バジャウの地先漁業は生産性が低いためにトロール漁に負けてしまったらしく、ガヤ島ではまったくとっていいほど漁の小舟を見かけない。10代前半の女の子たちもコタキナバルの食堂に働きにきている。私たちが朝食をとるワントン屋の従業員は全員ガヤの娘である。

栈橋に並ぶ杭上家屋をのぞくとおかみさんたちが中国鍋でサカナを揚げている。あつあつのアジはなかなかうまい。彼女たちはコタキナバルの市場でサカナを仕入れ家で揚げてまた町へ

運んで売っている。はしけで10分とかからないのだから造作もないと言ってしまえばそれまでだが家舟のスタイルが消えていくのはいくらか寂しい。

注意するとコタキナバルにはバジャウ海民の痕跡がはっきりと刻まれている。私が常宿にしている Capital Hotel は中の上クラスだが、ここの漢字名は「亜庇大京都酒店」という。亜庇はマラヤ=インドネシア語の api (火) である。api-api は現代マラヤ語でマッチ。汽水帯沼地のマングローブは木質が紅いので中国名は「紅樹」、マラヤ=インドネシア語で api だ。その漢字の当て字が亜庇である。North Borneo Chartered Co. としてイギリス植民地となるその前、このコタキナバルからガヤ島一帯はマングローブの密生する沼地で、そこにバジャウ族が海上村をたて、華人が寄生してバジャウの僅かな海産物（たぶんナマコと白蝶貝）を輸出していたのだと私は推定している。植民地時代の英語名 Jesselton は私の知る限り格式ある Jesselton Hotel にしか残っていないが、亜庇はスーパーやホテル名としてあちこちに見掛ける。api=亜庇が Jesselton よりよほど古く住民の脳裏に刻まれていることは明らかである。

また別のケース。クダットからコタキナバルへもどる丁度中間から西へ入ったところにランパヤン=ウル村 (Kg. Rampayan Ulu) がある。イラヌン (Illanun) 族の村である。Ulu (上流) という単語を村名につけていることが示すように、ここは海岸ではなく川をいくらかさかのぼった岸のマングローブを拓いて四角いプールのような船着き場を造っている。船外機付きの漁船とダブルアウトリガーの小舟があった。栈橋には刺し網、まき網など各種の網があった。かなり手広く漁業を営んでいる。イラヌンはミンダナオ島南西岸のイラナ湾 (Illana) を本拠地とする海民である。19世紀島嶼東南アジアには海賊の根拠地が三つあった。マラッカ海峽南端、マカッサル海峽南端、スルー群島である。とくにスルー海賊はいくつもの船隊を遠征させて荒しまわるので悪名が高かった。毎年の季節風によってシンガポールを襲うのはスルー海賊だったが、半島の人々は「ラヌン海賊」と呼んでとくに恐れた。マレーシア語の辞典は lanun を「海賊」としている。この lanun が Illanun である。ミンダナオの北岸イリガン (Illigan) から 600 m ほど登った所にラナオ (Lanao) 湖がありマラナオ (Maranao) 族が住んでいる。この湖は淡水魚が豊富で周囲には水田が広がっている。マラナオ族は半農半漁の種族である。この Lanao も Illanun もミンダナオの語源となった Maguindanao も湖を意味するマラヨ=インドネシア語の danau を語根としている。私はイラヌン族とマラナオ族は祖先を共有する人々ではないかと想像している。ここのランパヤン=ウル村にはかなり広い水田がある。家も4室ほどある大きな構えである。やはり半農半漁の村らしい。これまでサバ北部のクダット、ピタス地方の海辺で出遇った漁村はいずれも貧しく、ひっそりと「隠れ棲む」といった風情だったが、ここは堂々と豊かな村である。

#### IV Cocos Islanders

さて前述の Cocos Islanders とはどのような人々かという問題である。この疑問について1993年4～5月のサバ旅行は偶然のきっかけから豊かな収穫をもたらした。私がコタキナバルに到着した4月24日にクアラルンプールで出ている *New Straits Times* 紙が “Tracing it home” という見出しで、オーストラリアで出版された Pauline Bunce, *Kokos (Keeling) Islands—Austaralian Attols in the Indian Ocean*, Milton Queensland, Jacaranda, 1988の紹介記事をのせていたのである。この書物が Padilah Haji Ali の手によってマラヤ語に訳されそれがオーストラリア側からマレーシアに贈呈された。新聞記事の見出しは “ふるさとへの道をさぐる” といった意味だろう。この記事で私はようやく探し求めるココス島がはるかインド洋上の珊瑚礁群であると知った。今日の地図は、水路図を別として、どれも陸地の領土を中心に描かれているので大海のどまんなかの孤島などのせていないものが多い。この島もそれである。ココスは百科事典によればダーウィンから西方へ 3,700 km, パースから 2,768 km 離れたインド洋上の島である。直線距離からするとシンガポールやジャカルタのほうがはるかに近いはずだが、今日まで私が調べた限りでは、こちらからの空路は開かれていない。京都大学東南アジア研究センターにきているマードック大学の James F. Warren 教授にたずねると「ココスにはパースからしか飛行機は飛んでいない。あそこはマラヤ人奴隷が拓いた島だ」と教えてくれた。オーストラリアで23年も過ごした京都精華大学学長の柴谷篤弘さんは「ココス島のことはいくよくよく聞くよ」ということだった。ことほどさように、住民の大半はマラヤ系であるのにオーストラリア領に組込まれたために情報も交通もオーストラリアと繋がっていてマレーシアでは知られていない。こんなところにも植民地分割の不幸が残っている。

若い人たちと 4WD をレンタルしてコタキナバル→サンダカン→タワウを歩いた。サンダカンの 100 km ほど手前を北へフェリーなど使ってかなり入ったナンゴー (Nangho) 地区に Sapi Plantations と SLDB の Nangho Plantation と Pamol Plantations がある。いずれも大資本やサバ州公社の拓いたオイルパームのプランテーションである。この地域を最初にオイルパーム栽培に仕上げたのは Pamol であり、これはユニリバーの農園である。ここは前から訪れてみたかったのだが、あまりに不便で行けなかった。現在、油脂化学産業で川上の農園栽培から中流搾油をへて川下の油脂化学生産まで統一したシステムを完成しているのは世界でも数えるほどしかなく、そのうちの一つがユニリバーである。他の油脂化学大企業はサバに進出してはいない。しかもこんな奥地のオイルパーム農園を1960年というごく初期に拓くなど異例のことだ。それがどうしてだったのか。いくらか曲折はあったが Pamol のプランテーションに泊めてもらい、幹部から農園の歴史を聞きえた。

North Borneo Chartered Co. というイギリス植民地の成立当初の1880年代、最初のプラン

テーション作物はタバコだった。オランダ人、ドイツ人、イギリス人などのプランターが、当時葉巻用タバコの名産地だったスマトラのディリ地方から移ってきた。タバコ農園は川の中上流の内陸に拓かれ、そこに動員されたのは純粹プリブミのカダサン、オランスンガイなどであった。品質のよい葉タバコが生産されて成功したかにみえたが、1903年にアメリカが国内タバコ栽培業者を保護するためにマッキノン関税法を制定すると、輸出市場を失った北ボルネオのタバコ農園の多くはつぶれてしまい、その土地は放置されたままになった。そしてもとの熱帯雨林にもどっていった。60年近くの時をへてユニバーの社員 Reslie Davidson がオイルパームの栽培適地を求めてここにやって来た。今でも交通はかなり不便だから、当時はやはり相当のジャングルだったはずでここまで入りこんだのは、この Davidson が進取の気性に富んだ冒険男だったからに違いない。彼はタバコ農園跡地の所有者がオランダ人未亡人であることを捜しだし、その所有権を譲り受け営々と努力してオイルパーム農園を拓いた。現在それは総面積 8,400 ha、労働者900人を常用する4つの農園となっている。ゴルフ場、テニスコート、バスケットコート、プールを備え典型的な植民地型プランテーションである。開発者 Davidson はサバ社会への貢献によりマラヤ貴族の称号 *Datuk* を与えられロンドン本社の重役になっていたが92年65歳の定年をむかえ引退したという。その年齢から逆算すると、彼がこの内陸に入り来んだのは31歳頃だったろう。

農園幹部に「Cocos Islanders はいないか」と尋ねるといとも簡単に「いるよ」という。そこへ案内してもらった。Pamol 農園はクランガイ (Kulangai) 河の中流域にあってパーム油をこの河の支流から舟で河口へ運んでいる。河はごく浅くこんな奥地に入っても潮が上ってくる。そうした満潮のときしか舟を下ろせない。すでに農園の外に出ていたが貯木場などがあつた。内陸奥地に新しく拓かれるオイルパーム農園はたいていオランウータンや象の出没する森林伐採地に接している。サンダカンのゴマントン地区などその典型である。森林伐採の跡地をオイルパーム農園化するシステムができています。

Pamol 農園の外れがココス島民の集落だった。不在ではあつたが村長もいる。ここで生まれた子どもたちやマラヤ人、プリブミの妻たちを含めて村の人口は200人ほどである。この集落のハジの家に行った。Haji Dick bin Bohel は82歳の老人である。Pamol 農園に勤めて定年退職し隣接する土地に4haのオイルパーム小農園を拓いて暮らしている。奥さんは52歳のジャワ人である。5番目のつれそいだという。遠くの野菜畑に作業にいらっていたがカミサンがオホーイオホーイと呼ぶと戻ってきた。汗に濡れたシャツを脱ぐと鬢鏤たる体格、まったくうらやましい。

彼は1950年頃ココス島からシンガポールに渡ってきた。戦後ココス島では食料不足から暴動が起きそうになり英人マクリンが島民数百人をシンガポールに送り返した。そのときの最初の引率者が英人 John Ross だった。(この名前はその後何度かサバ州東岸のココス村で聞い

た。もっと考証しなければならないが、ココス島を戦後まで私有しココナツ農園を拓いていたのが Clunies-Ross 一族だからその一員かもしれない。) ハジは最初シンガポールで働きサバのセガマ (Segama) 地区のタバコ農園で mandur (人夫頭) になった。その後 Reslie Davidson の招きでここに移りやはり mandur を勤めた。1960年代のことだろう。現在、ハジはオイルパームの実は Pamol 農園に売り、トリやウサギを飼いいくらかの野菜を栽培し、カミサンが焼く菓子とともに村を売って歩く働き者である。このココス村で結婚する島民はハジの承認をえなければならない。壁にさまざまな証書が飾ってあった。

戦後の食料暴動云々について *Australian Encyclopaedia*, 1988 (p. 742) はつぎのように説明している。「第二次世界大戦が終わったところココス島の人口は Clunies-Ross 農園の雇用能力をはるかに越える数になっていた。そこで計画的移民政策によって1948年から1951年にかけて1,600人以上の移民が送り出された。その費用は Clunies-Ross 農園とシンガポール政府が負担した。クリスマス島やシンガポールに職をえた移民もあったが、より多くは現在マレーシア領サバとなっている北ボルネオのプランテーションに落ち着いた。この移民送り出しによってココス島の人口は2/3ほどに減った。」

そこでハジが最初に働いていたラハッド=ダトゥ (Lahad Datu) 地区のセガマを訪ねた。セガマはかなりの大河である。鉄橋を渡って西へしばらく入ったところにその村はあった。裕福そうなきちんとした村である。Kg. Kokos と立札がある。漢字広告の商店などあるところからすると華人もいるらしい。ちょうど金曜日の昼さがり、モスクを訪ねると礼装した年よりたちがいた。やはりここも1950年代にココス島民が渡ってきて拓いた村だった。オイルパームもあるがココヤシが多い。それを御馳走になった。モスクの年よりたちは Pamol の老ハジのことをよく知っていた。私たちが彼を訪ねたことを知ると急に親しみを顔に現した。同じココス島出身者であること、ハジというイスラム権威の持ち主であることが、知名度の高さになっているのだろう。

タワウ地区はサンダカン地区と並んで現在サバ州でオイルパーム栽培が集中している土地柄である。ここのプランテーション発展には前史がある。Pamol プランテーションで触れたようなタバコ農園は今世紀始めにほとんど潰れてしまい、次のプランテーション作物は1910年代に始まるゴムである。タワウ地区では1910年ころから邦人零細農民が入植し次いで久原房之助(後に日本産業株式会社)、三菱の資金をえた窪田阡米(くぼたうねめ)が大プランテーションを拓いた。邦人農園はゴムやココナツも栽培したが主作物はアバカ(マニラ麻)である。タワウ地区のプランテーション産業の基礎を築いたのは日本人だった。今日でもタワウの町には Jalan Kuhara (久原通り) がある。敗戦によって彼らは農園を没収され帰国した。

この邦人農園を戦後にそっくり継承したのが英国政府資本の CDC (Colonial Development Corporation; 後に Commonwealth Development Corporation と改称) という組織である。これ

はかつての満鉄に現在の ODA の金融機能を持たせたような政府機関で1992年世界の発展途上国で301の development project にかかわっている。タワウでは1949年に進出してきて邦人農園の土地を取得し、子会社の BAL (Borneo Abaca Ltd.) にアバカ農園を経営させた。BAL は100%イギリス政府資本である。その農園は今日 16,000 ha にまで拡大され単一企業体の経営するオイルパーム農園としてはサバ州最大のものとなっている。

そのタワウ地区にもココス村があった。町から東へ 15 km ほど行った街道沿いである。バルング＝ココス村 (Kg. Balung Kokos) という。この村のココス島移民は1949年 CDC が進出するのと時を同じくしてここに入植しそのタイガー農園で働いた。裕福そうな立派な家並である。バルングは川の名であり、その中流にかつては窪田阡米の麻農園があった。バルング＝ココスは農業協同組合経営の村である。ハイウェイから入った十字路には Balung Cocos Islanders Co-operative Land Development Society Ltd. Pengurusi: H. J. Kalbie Itla と書いた堂々たる看板があった。

その組合の指導者ハジ・カルビーを訪ねて話をきいた。天井に扇風機をつけソファもある家である。入植当時このあたりはまだ熱帯雨林だった。確かに庭に大木の切株が残っている家もある。1962年に CDC から Balung Estate の土地を購入した。この記述が正しいとするとこれはサバが独立する以前の Crown Colony の時期で、その当時はまだ Land Development Cooperative として登記されていなかったはずだからココス島移民はきわめて団結力があったことになる。現在組合員は138戸、農園は 700 ha、そのうち 400 ha がオイルパームである。残りはカカオ、ココナツ、ドリアン、ランブータンなどである。組合員一人当たり 15 ha の持ち分がある。ただしこれは特定の 15 ha ではなく抽象的な権利である。オイルパームの苗はサバ州農業省が無料で配ってくれる。組合長はきわめて好意的で「今度きたらココス風のお祭りに招んであげよう」といった。かれは1975年にメッカ詣でを済ませハジの称号を得た。

ココス島移民できわめて特徴的なのは、かれらがマラヤ語を母語としムスリムでありながらサバに溶け込んでしまわずどこでも集団を維持していることである。しかもそのまとも具合、つまり identity はココス島民であることを中心としている。太古の大昔、列島のどこかに一粒の原種があってそこから自分たちは生まれてきたと日本人の多くは信じているが、ココス島移民の identity は150年ほど前に奴隷として拉致された植民地農園で形成されたものである。だから彼らはこれまで訪ねあてた三つのケースではいずれも「ココス村」と目立つように表示している。バジャウ、イラヌン、ウビアンなどの村とは趣を異にする。しかもかれらはサバに入植してからも植民地型プランテーションと強く結びついて生きている。ヒト族の identity 形成には実にさまざまな仕方があるものだ。

## V む す び

サバは主要移民であるマラヤ人、華人、インドネシア人を別としても実にさまざまな小集団があちこちから渡来して住んでいる。かれらの念頭にあるのは国家ではない。そうした土地がこの地球にはたくさんある。地球上の諸集団がいずれも原種から出発して国家社会を形成していると考えるのは近代民族国家の迷想にすぎない。その迷想から人類が解放されるには時間が掛かるし、今日の旧ユーゴスラビアやアフリカのような混乱をへて多くの年寄りや貧しい人々が犠牲になっていくのだろう。